

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十四年十二月一日発行(毎月一回一日発行)  
第十九卷八号(通卷第二二四号)

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第224号

12. 2012

伊予絢

品川 鈴子

伊予絢の蒲団並べて一男四女

年の夜は身ぐるみ脱ぎて洗濯す

鉢毎に残菊六甲道の湯屋

双葉山の稽古場龍の玉ころげ



首洗ひ井戸を覗けば紅葉照り

日帰りの会議上京ゴム標

エアメールの羽挽げ天使クリスマス

数の子の粘膜剥がす指訓<sup>リハ、ピリ</sup>練

飾り餅のみに昔の店探す

年用意メモの隅には尿パッド



# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 林 哲夫

先輩に囲まれ今日も汗の句座  
瓦礫積むトラックの列原爆忌  
震災忌夕刊読めぬ老眼鏡  
子に教へ吾も手習鬼貫忌  
子持鮎写生をしても焼き惜しむ

兵庫 林 美智

亡夫に問ふもう帰るのと茄子の馬  
掌にいつばいとれて思案の秋茗荷  
コーヒーを右手にしばし秋の庭  
少しだけ紅灰めかし菊の宴  
亡夫よりのメール届かず星月夜

兵庫 平田恵美子

ふるさとの話へ跳びて麦こがし  
花木権一泊だけのミニ家出  
漆黒の空駆けめぐる稲光  
秋鯖の青き光を筒切りす  
彼の世までつづく退屈長き夜

愛媛 福島松子

駅ビルの足場外され八月尽  
かなかなや湯桶置く音どこからか  
つくつくし木陰のベンチは満席に  
思春期は行きつ戻りつ蚯蚓鳴く  
彫刻の庭ひとりじめ石たたき

愛媛 福田かよ子

十重二十重終盤花火煙満つ  
極早稲刈る会話にならぬ老の耳  
自動扉我より先に穴まどい  
カーナビに誘導されつ秋探す  
走り根のくねる山道男郎花

兵庫 藤井久仁子

逆光に切絵のやうな螭螂よ  
秋気澄む乗鞍よりの槍穂高  
ポケットの鍵も洗濯秋うらら  
母逝きしより鈴虫の声聞かず  
街に聞くヒールの音の秋気かな

兵庫 藤田かもめ

童より爺婆多き地藏盆  
嬢捨駅厄日の列車通り過ぐ  
新走り手向く鬼貫親子塚  
三猿に徹し吹つ切る我が秋思  
托鉢に千軒の米豊の秋

大阪 藤田京子

十六夜の月光に憂さ忘れたり  
腰痛に歩み止むれば昼の虫  
久々にマニキュア窓に居待月  
通院の夫の後先秋の蝶  
隣のが早く色づく庭の柿

兵庫 史 あかり

秋声を聞いてゐるかに犬の耳  
粒ごとに光放てり黒葡萄  
宮跡を自在に飛んで秋あかね  
花芙蓉独り住まひを身ぎれいに  
苦瓜の疣の造形輪切りにす

兵庫 古井公代

葉に隠れジャックナイフの刀なたの豆  
燕去月友より電話つぎつぎと  
塹壕をしのぶ漢の秋耕は  
鷹揚な嫁のぶつ切り秋刀魚飯  
病み上りのインコ「オハヨウ」今朝の秋

大阪 古林田鶴子

夏ばては脳も狂はせ苦吟せり  
子供山車今年デビューの太鼓方  
北欧へ幼の機影雲の峰  
初挑戦夫の手料理稲荷ずし  
早稲の穂の三日見ぬ間に刈り取られ

兵庫 細川知子

たたずめば吾を周遊鬼やんま  
高みよりここまでおいでましら茸  
生身魂カフエで娘と待ち合はせ  
仲良しも喧嘩いくたび夏休み  
夏休みどの子の爪もマニキュアを

兵庫 細野恵久

山頂の木枯走査線乱す  
牛丼を食べこぼしけり十二月  
霜おいてものみなやさし峡の里  
冬至の日雲に晩鐘聞くとし  
社会鍋見慣れぬ紙幣交りをり

愛媛 松井洋子

溪深く樵林涼し仙山線  
翁の碑に縫る空蟬立石寺  
せみ塚を過ぎて高きに蟬時雨  
汗しとど峰まで到る寺の磴  
雷鳴の俄に近し奥の院

埼玉 松本清川

黄金虫毎夜ぶんぶん居間を飛ぶ  
一本杖（日本一長い杖の地金位にして）のレルヒの像も汗をかき  
焼そばの係となりて秋祭  
お早ようを交す農道稲穂垂る  
紅葉宿部屋の名凡て謡曲名

東京 松本アイ

瀬戸内の航跡涼し大橋四つ  
バンドネオン船上に聞く夜の短くて  
皮うすき西瓜は進化しているの  
予期もせぬ香水「ミツコ」に出合いけり  
韓国に勢いありて万博暑し

愛媛 松本恒子

山門の仁王の目抜く稲光  
画き終へ少し風ほし秋桜  
店舗中迷はず買ひし吾亦紅  
秋あかね古りに古りたる杭えらび  
挨拶をしてしまひさう案山子立つ

愛媛 三浦澄江

夏休み向日葵の皆道に向く  
だみ声で不漁をかこつ夏の浜  
大花火揚げる河原の闇舞台  
篝火の映る火の水鶴は潜る  
能面のふくみ笑ひやそぞろ寒

兵庫 三枝邦光

乱れ咲く秋の七草茶事の庭  
虫すだく姉川堤戦の碑  
秒針の刻みに真夜の鉦叩  
水底に光るもの有り野川澄む  
写経墨匂ふ文机虫の声

兵庫 水野範子

半円の虹に治まる復興船  
暗がりの仕掛花火師空を見ず  
吊橋に秋風渡る峡静か  
秋日傘運河の風の青青と  
小児科のテレビの台に木の実増え

兵庫 水野弘

汗の手や先輩偲ぶ一人旅  
秋時雨連れ呼ぶ鳩の高鳴きに  
楠落葉小学校の友偲ぶ  
夏帽子忘れし店のレジ台  
切磋琢磨句友の笑顔秋迎ふ

香川 三橋早苗

膝痛に腰痛乗せて墓洗ふ  
的を射る手応へは無し葉月尽  
正眼に構へ面打ち夏終はる  
フェルメールブルーに魅入り秋暑し  
虫の音に合はせ卵白泡立てる

茨城 三輪慶子

冬瓜を両手に受けて笑ひけり  
人氣なき農家の裏手桐一葉  
桐一葉旧道沿ひの瓦塀  
水澄めり昔諍ひありし村  
前方の車の尾灯霧の富士

埼玉 向江醇子

渡る風流るる雲に秋を知る  
残暑なほ天下の銀座昼下り  
秋暑し屋上遊園いまだ在り  
秋立つ日一人籠りて爪を塗る  
震災忌南海トラフの記事ばかり

佐賀 森田子月

越してまずパン屋はぬくしフランスパン  
引つ越してやつと洗濯物の日向ぼこ  
引つ越しの布団は薄し風邪葉  
引つ越しの埃ぬぐひて鏡寒む  
新住所おぼえて道も朝涼し

大阪 師岡洋子

西鶴忌女性専用車に座る  
一言の挨拶ながし菊脛  
這ひあがる蔓のつかみし秋簾  
石榴はぜ鴉のさわぎ頭上にす  
膝に来る蟻蛸ガーデンコンサート

東京 安田とし子

水澄みて烏の呼応響き含ふ  
夕富士の濁点となり鳥渡る  
淡紅のほどよき酢漬新生姜  
枝豆食む伝記よむ目は逸らさず  
酸橘二三片午後の紅茶に浮かせたり

愛媛 梁瀬照恵

貧血の掌にサクランボの紅光る  
高階に病みて夏雲追うばかり  
竹落葉掃き園丁の今日終る  
猛禽の眼もて監督炎天に  
夏雲を串刺しにしてスカイツリー

香川 横内かよこ

秋蝶の国際カップル人目引く  
檸檬買ふ幾たび読みぬ智恵子抄  
愛嬌のあるを褒められ秋刀魚焼く  
初さんま長旅を経て整列す  
祖父の名を一字もらふ子墓洗ふ

大阪 吉田和子

梅雨湿りヒールの軋むダンス場  
太股にすり傷みせて短パンツ  
着陸に機体軋ます夏嵐  
芭蕉墓石榴の花の色添へて  
薔薇園の閉門真近烏寄る

# 鈴の奏

品川鈴子選

台風にゆれし佛壇埃舞ふ 兵庫 長谷川としゑ

長き夜のクイズ解けたる日曜日

この西瓜完熟なれど種茶色

寝やの窓開けて満月後光さす

青嵐古代の匂ふ茅葺家 兵庫 本木下清美

門口に防火用水終戦日

雨上がり水王光る青密柑

小屋の牛みんな退屈稲の花 兵庫 内藤 京子

舞良戸の庵は方丈落ち葉ふる

斎王代禊の池に秋映る

秋日和紙垂より覗く唐車

藪蘭の瀬見の水際静もれり 大阪 丹後みゆき

とりとめも無く独居の梨を剥く

長兄の影なき米寿秋澄めり

年毎に緩みの目立ち罽雲

九頭龍の鮎田楽に姉妹楽

一日中耳鳴り止まず夕は秋 兵庫 水上 貞子

秋立つや次々届く見舞状

補聴器が命となりし秋の風

工場の様な耳鳴り秋の夜

天空に近き湖畔の薄紅葉 大阪 八幡 操

車椅子やさしく押され萩の径

風生庵出ずれば蜻蛉群れあそぶ

秋雲を踏まへて王者富士の嶺 兵庫 吉本 淳

風にゆれ水車場の陰吾亦紅

吾亦紅胸に抱きて野良帰り

たそがれて紅のこぼるる酔芙蓉

敬老の日声を揃へて童歌 兵庫 岡田満喜子

朝顔の水色やがて空に溶け

海王丸「登檣礼」に蜻蛉来る

最大の客船離る秋ともし

二人居の話の間合ちちる虫 兵庫 磯田せい子

三尺帯すぐにゆるむ子地藏盆

白壁を蟬の脱殻まぶしめる

八月尽喜寿手にとどく齒科通い

飛蝗生れ早や貫禄の胸を反る

秀  
鈴  
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句 十五句 高橋 大三 〃

\*選句は全て 品川鈴子

台風にゆれし佛壇埃舞ふ

長谷川としゑ

がら死を待つだけの生涯。

巨大な台風の直撃を受けては、その為すがまま住み慣れた家に潜んでいる他ない。代々の先祖を安らかに祀る仏壇は家のほぼ中心の辺にでんと据えられてあり、滅多に動くこともない。そこから埃が舞あがるとは。祖霊も屋台骨も人や家畜もおびえて震えている証拠。

小屋の牛みんな退屈稲の花

本木下晴美

まいらど 舞良戸の庵は方丈落ち葉ふる  
舞良戸とは和風住宅の建具のひとつ、框の間に綿板を張り表面には細い棧を横に小間隔に付けた引き戸。その小さな庵の風雅さを落葉も慕う。

内藤 京子

とりとめも無く独居の梨を剥く

丹後みゆき

昔の牛は主に農耕の助けに粗食で鞭打ちながらこき使った。だが此の頃の畜産では乳牛や食肉用には、なるべく美食飽食、運動不足で、一頭ずつ個室に繋がれる。放牧なら仲間や風景に接し慰めもあるが、人間本位に小屋で飼われる牛は、稲の花の香りにも近寄れず、結構な身分に見えるな

一人暮らしをしていると、どうしてもというわけでもないのに、とりとめもなく梨を剥いている自分に気が付くことがある。そういえば、よくおしゃべりをしたあの友達は今どうしてるのかなあといったところでしょうか。

工場のような耳鳴り秋の夜

水上 貞子

秋の夜、耳鳴り——まるで一日中工場の中にいるような不快な騒音に囲まれ続けている。医者に通つても、なかなか治らない。あちこちから温かい見舞いをいただき、ありがたいけれど、この症状にはたまらない。もう嫌だ。

車椅子やさしく押され秋の径

八幡 操

今日も小径の傾斜や凸凹に気遣いながら車椅子をやさしく押してくれる人がいる。作者が秋の花を楽しんでいる様子に、車椅子を押す人も満足している、そんなささやかな幸せが伝わってきます。

敬老の日声を揃へて童歌

吉本 淳

歌っているのは、慰問に来た可愛い幼稚園児か。いえ、

老人たち白身に違いない気がします。老人の集まりでは、年齢も、経験をしてきたことも、考えもそれぞれ違います。だからこそ老人たちが気持を一つにして楽しく歌えるのは童歌しかない。そう感じさせてくれる句です。

二人居の話の間合ちちろ虫

岡田満喜子

夫婦、あるいは親子二人住まいでの楽しい会話、その会話の途中あるいは途切れ目におろぎの音が聞こえてきます。それは会話を妨げるものではなく、そのまま話を続けるのも、話を飛躍させたり、転換させたりするきっかけにするのも自由です。静かな会話の触媒かも。

三尺帯すぐにゆるむ子地藏盆

磯田せい子

地藏盆は子供が主役。福引をしたり、おやつをもらったり、子供たちは一日楽しみます。はしゃぐ子もいて、三尺帯と呼ばれる子供用の帯もはしゃいでいるうちにたびたびゆるんでしまいます。そんなあどけない様子が微笑ましい句です。(以下略)